

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 28 年 6 月 5 日	
所属部局・職	霊長類研究所・修士課程学生
氏名	峠 明杜

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
宮崎県 幸島
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
幸島実習
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 26 年 4 月 24 日 ~ 平成 26 年 4 月 30 日 (7 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
京都大学
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
本実習は日本のサル学の生誕の地とされる宮崎県幸島で行われた。参加者はそれぞれ自分で研究テーマを決めて調査を行い、フィールドワークやデータ分析のやり方、統計的手法などについて習得することが本実習の目的であった。以下に本実習の日程を示す。
【日程】 (4/23 犬山市発) 4/24 ステーション着 4/25 予備観察 4/26 データ収集 4/27 都井岬 4/28 データ収集、データ分析、スライド作成 4/29 発表、打ち上げ 4/30 清掃、ステーション発 (5/1 犬山市着)
◎研究 幸島にはニホンザルの群れが2群存在する。現在、幸島では週に最大3回餌撒き(小麦)が行われており、半餌付け群とされている。予備観察の際に、サルたちの採食速度すなわち単位時間あたりの麦採食個数が容易に計測できることに注目した。また自然群ではまず手に入らない各個体の体重データが揃っていることに魅力を感じた。そこで、これらの2つのパラメータに相関が見られるかを検証することにした。 採食速度は1分間に食べた麦の個数とし、1分間の個体追跡観察ののち、別の個体を1分間追跡するという操作を繰り返した。データ数を稼ぐために同様のデータ収集を同期の中村泉さんに協力していただき、収集したデータを二人で共有した。個体識別・体重データ提供は技術職員の鈴木崇文氏に協力していただいた。 結果として、体重と採食速度の間には統計的に有意な相関は見られなかった。しかし、統計解析プログラムRを用いて、ノンパラメトリック検定を行う方法を学べたことは本実習の一番大きな収穫であった。
◎都井岬 4月27日は悪天候で幸島に渡れなかったため、都井岬に半野生馬を見に行った。まずビジターセンターで様々な展示を見学した。印象的であったのはウマを個体識別するために行われる烙印についての解説であった。ウマへのストレスを軽減するために最近では凍結烙印という手法が導入されつつあるようだ。 外に出てみると、家族単位で誘導するウマを間近で観察することができた。近づいても人をあまり恐れず、のんびりとした時間を過ごしていたのが印象的であった。
◎共同生活 ステーションでは11名の学生(1名の留学生を含む)と2名の教員が共同生活を送った。毎日三食の準備の際には、非常に統率のとれたチームワークを発揮することができた。また中国からの留学生に本場の餃子作りをレクチャーしてもらい実践したり、空き時間に全員で近くの海で釣りをし帰国するまで留学生も含め

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

た同期全体の仲を深めることができた。

【総括】

自分はいままで嵐山(京都)、金華山島(宮城)でニホンザルの行動観察をしたことがある。今回の実習を通して、「ニホンザルは地域個体群によって生態や行動が違う」ということを改めて実感した。また、当初の目的のひとつであった統計手法の習得を達成できたことや、自分が興味を持っている採食行動についての知見を広めることができたことは、今後の自分の研究にも活用できると考えられ、非常に良い経験となった。



麦撒き直後の様子



麦を拾う様子



都井岬の半野生ウマ



集合写真(撮影者：鈴木崇文)

6. その他 (特記事項など)

本実習はPWSの支援を受けて行われました。本実習にかかわってくださった方々に篤く御礼申し上げます。